

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 6 部門第 1 区分

【発行日】平成30年4月12日 (2018.4.12)

【公開番号】特開2016-166788(P2016-166788A)

【公開日】平成28年9月15日 (2016.9.15)

【年通号数】公開・登録公報2016-055

【出願番号】特願2015-46370(P2015-46370)

【国際特許分類】

G 0 1 N 21/27 (2006.01)

G 0 1 J 3/32 (2006.01)

G 0 1 J 3/50 (2006.01)

B 4 1 J 2/01 (2006.01)

B 4 1 J 2/17 (2006.01)

G 0 1 N 21/15 (2006.01)

【 F I 】

G 0 1 N 21/27 B

G 0 1 J 3/32

G 0 1 J 3/50

B 4 1 J 2/01 4 5 1

B 4 1 J 2/17 1 0 3

G 0 1 N 21/15

【手続補正書】

【提出日】平成30年3月2日 (2018.3.2)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 4 6

【補正方法】変更

【補正の内容】

【 0 0 4 6 】

メモリ 1 5 3 は、プリンター 1 0 の動作を制御する各種プログラムや各種データが記憶されている。

各種データとしては、例えば、波長可変干渉フィルター 5 を制御する際の、静電アクチュエーター 5 6 への印加電圧に対する、波長可変干渉フィルター 5 を透過する光の波長を示した V - データ、印刷データとして含まれる色データに対する各インクの吐出量を記憶した印刷プロファイルデータ等が挙げられる。

なお、光源 1 7 1 A の各波長に対する発光特性（発光スペクトル）や、受光部 1 7 3 の各波長に対する受光特性（受光感度特性）等が記憶されていてもよい。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 6 8

【補正方法】変更

【補正の内容】

【 0 0 6 8 】

クリーニング処理が終了したら、光量変化判定手段 1 8 8 は、ステップ S 1 と同様の手順で、白色基準板 1 9 1 の分光測定を実施させ、第 2 の測定値を取得させる（ステップ S 5 ）。

次に、光量変化判定手段 1 8 8 は、ステップ S 3 と同様に、第 2 測定値と基準値とに基づく回帰分析により取得された第 2 回帰直線 L 2 の傾きの変化量が、基準傾き（基準線 L

0 の傾き) に対して、第 2 閾値を超えるか否かを判定する(ステップ S 6)。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0077

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0077】

光量変化判定手段 188 は、回帰直線の傾きに基づいて光源部 171 の光量変化を判定する。ここで、測定値は、受光部 173 による受光量に対応する値であり、光源部 171 の光量に応じて変化する。従って、回帰直線の傾きに変化がない場合、光源部 171 の光量が変化していないと判定でき、当該傾きに変化がある場合、光源部 171 の光量が変化している可能性があるとして判定できる。このように、本実施形態では、回帰直線の傾きを参照することにより、光源部 171 の光量が変化したか否かを判定できる。

【手続補正 4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0096

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0096】

上記各実施形態では、光源 171 A としてハロゲンランプやキセノンランプ、白色 LED 等を例示したが、本発明はこれに限定されない。例えば、RGB の各色 LED により白色光を発光させるようにしてもよい。

ここで、複数色の光源を同時に点灯させる構成では、各光源の波長域毎に回帰直線を分割してもよい。また、R のみ点灯させた際の基準値と測定値とに基づく回帰直線、G のみ点灯させた際の回帰直線、B のみ点灯させた際の回帰直線から、それぞれの光源光量の異常を判定してもよい。

また、同時に複数の光源を点灯させる場合では、各光源毎に基準値を取得しておき、1 つのみを点灯させて、各光源の光源光量の異常を個別に判定してもよい。

【手続補正 5】

【補正対象書類名】図面

【補正対象項目名】図 2

【補正方法】変更

【補正の内容】

【 図 2 】

